

それからの
武蔵

第四卷

それからの武蔵

第四卷
島原篇

小山勝清

東都書房





© K. Koyama 1964

それからの武蔵 第四巻 島原篇	著 者 小 山 勝 清 発 行 者 斎 藤 修 一 郎 印 刷 所 一 弘 社	昭和三十九年五月二十五日発行 昭和三十九年十一月二十日第五刷	東京都文京区音羽町三ノ一九 発 行 所 東 都 書 房 電話・東京(九四二)二一一一 振替口座・東京七二七三二	定 価 二 六 〇 円
-----------------	---	-----------------------------------	--	-------------

(製本・大進堂)

乱丁・落丁の際はおとりかえいたします。

島
原
篇

目
次

謀^ほ 十 出 爆 災^{さい} 熊 鬼^{おに} 焰^{ほのお}
字
の
略^{りやく} 旗 陣 発 厄^{やく} 風 合^あ 窓^{まど}

一五 一三 二三 九 五 四 元 セ

病	主 ^も	五	和	總	窮 ^{きゆう}
	水 ^ど	人		攻	
	屋 ^や				
床	敷 ^{しき}	組	光	擊	鼠 ^そ

二七	二四	二三	二五	二八	二七
----	----	----	----	----	----

装幀
カット

川合喜二郎
野口昂明

それから
の武蔵

第四卷
島原篇

焔^{はのあ}

の

窓^{まど}



前將軍足利義昭の孫娘といわれる由利姫が、キリシタンの遺児たちのために一肌ぬこうと決意したころ、武蔵の養子伊織は、主君小笠原侯の内命をうけて、ひそかに長崎にのりこんだ。

伊織が第一に訪ねたのは琵琶法師の森都だった。

森都は、証拠こそないが、由利姫と伊織が血をわけた姉と弟であることを知っている。

それで、伊織が姫にあいたいといった時、胸にあたゝかいものを感じて、

「姫も、さぞお喜び……」

と答えて、目をしばたゝいたが、伊織がつづけて、「父上は、むろん、姫が江戸から脱出されたのを喜んでおられる。しかし、実は、長崎へ長くとゞまっていることは好んでおられないのだ。長崎には火がもえている。その火が姫の胸にもえつくのを、おそれてもらえるのだ」

といったので、森都は、ぎょつとして目を見はった。武蔵が、それほどに姫の身を思っていることも

意外だったが、武蔵の察しのとおり、現にその火が姫の胸にもえうつろうとし、自分もそれに一役買っているのである。森都は、こまったことになったと首をかしげた。

伊織は、その様子を見て、

「森都、姫の身の上に、変ったことでもあるのか？」と、鋭く聞いた。

森都はあわてて、

「いや、さようなことはありません。だが、おっしゃるとおり、姫の胸の底には火がもえています。泉のように湧き出てくる智略ももっておられます。死をおそれぬ勇氣ももっておられます。伊織様、早い方がよろしい、これからすぐ、姫を訪ねましょう」と、腰をうかせた。

二人は、すぐ草庵の岡をおり、市内を横ぎって姫の家を訪れた。

玄関に立つて案内を乞うと、召使の少女が出て、「お師匠さんは、今しがたお出かけになりました」という。

「いずれへ？」と、きくと、

「お奉行さまへあいにくと、かごでお出かけになりました。お帰りは夕方とのこと」

夕方には、だいぶ間がある。

「伊織と申す者が訪ねて参った、今夜改めてお伺いすると伝えてくれ」

そういいおいて、二人は玄関をはなれた。

「奉行といえば、神尾内記という方だな。キリシタンや外国貿易の商人どもが、悪鬼のようにおそれている人物ときいている。姫はかねてこの人と、親しく往き来しておられるのか？」

伊織は、歩きながら森都に話しかけた。

「いえ、かねてというわけではありませんが……奉行は、姫の力量をよく知っていて、キリシタンの件につき姫の援助を求めているのです」

「して、姫の意向は？」

「さあ、それはわたくしにもわかりません。しかし、おそらく姫は今日奉行にあって、意中をもらされたものと推察します」

「そうか。で、奉行はどんなことを、姫に期待しているのだろうか？」

伊織は、きづかわしげにきいた。

二

伊織の間に、森都は厳肅な面もちで答えた。

「奉行が求めるところは、刑罰によらずしてキリシタンを転宗させ、民心を安定させることです。幕府は極端な刑罰をもってキリシタンにのぞんでいるのですが、これには一般の非難もあるし人心は動揺して、はては動乱のきざしさえあるのです。そこで、その緩和策として、キリシタンの懐柔と人心収攬の政策を考えている次第です。奉行は、伊豆守様の内意もあって、その役目をはたす適任者として、ひそかに姫に目をつけていたらしいのです」

「なるほど、姫はたしかに適任であろう。しかし、これでは幕府の政略におどる人形ではないか」

伊織は、語気を強めていった。

森都は、首をふっていった。

「いえ、今の姫は、たゞの人形ではありません。姫がもし、奉行の頼みをきくとすれば、高い人道的の立場からでしょう。それに姫の智略はすばらしい。逆に、奉行をおどらせることになるかも知れません」

伊織は、静かにうなずいた。

「うむ、それもわかる。しかし、そうしたことが姫をいつそう不幸に陥（おとし）れはしまいかと、父上は案じておられるのだ」

「伊織様」

森都は、ちょっと立ちどまり、あらたまった口調（くちよう）でいった。

「姫は、今までだって不幸です。武蔵様が、姫を案じられるのはわかりますが、姫を、今のまゝにしておくことが、幸福とは思いません。茶道の師匠（ししょう）として一生朽（く）ちはてることが、どうして幸福といえますよう」

伊織は、あわてて、

「いや、父上は、姫が肥後（ひご）の熊本へ行かれることを望んでおられるのだ」

「たとえば、熊本へいかれても、やっぱり、さびしく朽ちはてることにはがいがありますまい」

「うむ、それは……」

伊織は、森都の意外な攻勢（こうせい）にたじとなつた。

森都は、声を落してつづけた。

「伊織様、姫を幸福にする道が一つあります。おわ

かりですか？」

伊織は答えず、だまりこんで歩いていたが、やがて、つぶやくようにいった。

「父上のことだな」

「そうです。姫は、武蔵様に心をよせておられるのです。むろん世の常の恋慕（れんぼ）ではなく、武蔵様の高らかな精神が姫の魂（たましい）をうったのです。なのに、姫は武蔵様の孤高（ここう）の精神を理解（りかい）しておられるから、心の中をうちあけることすらできません。でも、恋慕は恋慕、思いを果さねば不幸になります。もし、武蔵様が姫の思いをおゆるしになったら、姫はいっぺんに幸福になれるでしょう」

伊織は、また、だまって歩いたが、なげくように、ぼつりと口をひらいた。

「父上には……それはできまい」

三

由利姫と長崎奉行神尾内記との内談は数刻（すうこく）におよんだが、まだとまらない。姫は、はげしい口調で、
「おのぞみどおり、捕われたキリシタンが、転宗（てんそう）す

るよう、骨折してもみましよう。わたくしの目的は、幼い子供たちを処刑から救うため、わたくしの手もとにひきとることです。それを認めてもらわねば、話はこれまで！」

と、いいきった。

「ま、ま、姫！一がいに、そうおっしゃっても困ります。親の罪状にもよるし、子供の年齢にもよります。すべて、白洲のさばきの結果ということにしたいでございます」

「だめです。十歳以下は、無条件にわたくしにひきとらせること、十歳以上十六歳以下はわたくしの判断にまかせることです」

「さゝ、それでは、拙者の役目が……」

「そなたの役目には、傷はつけません」

「と申して……」

「奉行所と、わたくしが敵味方になるのです。わたくしは、手をつくして子供たちを奪いとります。そなたは、奪われまいと、手をつくせばよい」

神尾内記は、きらりと目をむいた。

「そんな無茶なことが……」

「ほゝゝゝ」

姫は、とつぜん笑いだし、がらりと調子を変えた。「神尾殿、これは冗談……お言葉どおりにいたしますわ。万事、そなたの白洲のさばきにまかせましよう。その代り、遺児をひきとるわたくしの家を奉行直轄の遺児寮とし、絶対下役人を入れぬことだけは、固く約束していただきたい」

神尾は、ようやくうなずいた。

「いや、それは、しかと約束つかまつる。奉行所の事業として、キシタンの遺児をひきとつて育てるとすれば、それは恩威ならび行幕府の善政として、町人どもも氣をよくすることでしょう。そして、これをきっかけに、ぜひ人心を収攬していただきたい」

「おう、では、その屋敷をさつそくにも……」

「それも承知、すぐにも探すことにいたします」

こうして姫は、キシタン弾圧の緩和策として遺児寮をつくることになった。こうきめると、もう何の迷いもない。夕刻、はればれとして家にもどると、小女が、

「伊織さまとおっしゃる方が、座頭さんと、いっしょにおいでになりました」

と、つたえた。

「なに、伊織さま？」

姫は、さすがに声をはずませた。

「はい、夜分またお伺い申しますといつて、おかえりになりました」

「そお……」

姫は、伊織が何用あつて長崎にきたかと怪しんだが、いそいそとして夜を待った。そして、もしや、武蔵もいっしょではなからうかと、ひそかに胸をおどらせた。

四

伊織と森都は、夜になると姫を訪ねてきた。姉弟の証拠がないから、口には出さぬが、伊織と姫の間には、ほのかに肉親の情愛が流れていた。

たがいに、一別以来のあらましを語りあつてから、伊織は半ばさぐるように、

「姫、わたくしが長崎に参りましたのは、殿の内命により、キリシタンの動向を探査するためでございます」

とのべた。姫は、

「伊織さま、これからもう、姫とよばずに由利とよんで下さい」

といつて、すぐ話を元にもどした。

「それは、やりがいのある仕事と思います。幕府の今のやり方で、このまゝキリシタンが亡びると思ひませぬ。力には力をもつて立ち向かうという時が、きつとくると思います」

「この長崎においてですか？」

「そうです。今に、長崎にも、力をもつて役人に刃向うキリシタンが現れるでしょう。しかし、それだけに、長崎では大爆発を起すことにはなりません。一揆でも起すのは、じつと忍従している百姓たちです。この事にかぎらず、昔から一揆を起すのは百姓たちでした。何といつても、町人たちは領主の権力に依存しているのですから、団結して反抗するなどということはできないのです」

「なるほど」

伊織は、姫の見識に感じいった。

「しかし姫、いや由利さま、そうした一揆は、幕府にとつても不幸なできごとと思いますが、それを未

然にふせぐ方法がありますまいか？」

姫は微笑をふくんで、

「それは、男の方が考えることです。政治をやる男の方が……」

と答えたが、急に、けわしい表情になった。

「伊織さま！ この日本では、いや、おそらく世界中、女が政治にたずさわることは、許されていないのです。しかし、そのかわり、政治を超越して、まづしいものの、あわれなものの味方となるのは女です。合戦の場合にも、女は、傷ついた者は、敵味方の差別なく看護してあげたいのです。伊織さま！ わたくしも、近頃、キリシタンに興味をもちはじめました。しかし、それは政治の問題でなくて、愛情の問題です。罪なくして父母に殉じて殺されるキリシタンの子供たち、あるいは父母を失って路頭に迷うキリシタンの遺児たちを、わたくしは手をつかねて見おくることができなくなったのです」

伊織は、深くうなずいた。姫の心境がここまでに熟した以上、もう武蔵の気づかいを告げる必要もないと考えた。いくら愛していても、夫婦にならぬ以上、男女は、それぞれの道を往くよりほかはない

のである。

伊織は、姫がどんな方法で、キリシタンの遺児を保護するか知らない。奉行と、どんな話をしたかも知っていない。しかし、力をこめていった。

「由利さま！ よくわかりました。ぬかりなくやりなさいませ」

五

「はい。武蔵さまにあやかっつて、わたくし独りの道を歩きましょう」

姫は、眼をかゞやかせていった。

姫の生命の火は、たしかに躍動をはじめたようである。昨日まで姫の胸にあつた武蔵は、悠然と孤高の道を歩いていく静かな影像であつた。しかし今は、焰と燃えて戦う阿修羅の武蔵にかわつてゐる。

伊織は、心から姫を偉いと思ひ、父武蔵に劣らぬほどの女傑と見た。

「父にも、由利さまの心意気をつたえます。父もきつと、理解するでしょう」

「えゝ、女は女なりに戦つて、悔ない一生をおくる

つもりだと、お話し下さい」
「はい、由利さま。この伊織も、凡人なりに戦って
いきます」

伊織も、力をこめていいきった。

じっと聴きいつている森都のほおも、紅潮した。

このすぐれた姉弟？ の会話の中に、あたゝかい肉
親の情愛を感じたのであろう。

姫は、ふと森都を見て話しかけた。

「森都さん、今日からのわたくしは姫でなくて夜叉
です。もしかししたら、そなたにも迷惑をかけるかも
知れませぬぞ」

森都は、やゝあわてて、

「ひ、姫！ ごじょうだんを……」

「いえ、じょうだんではありません。わたくしも、
だいたい、そなたの仕事がわかりました。それは、
わたくしだってわざわざ幕府にたてつく気はなく、
だから奉行とも力を合わせる約束をしたけれど、し
かしキシタンとも仲よくしなければならぬ。それ
が奉行を困らせ、そなたにも迷惑をかけることにな
るかも知れぬ」

森都は、やっきになって、

「姫！ わたくしは、姫と奉行の会談に立ちあいは
いたしましたが、奉行の配下ではありません。姫に
いかなる所業があろうと、なんでわたくしが迷惑い
たしましょう。姫、わたくしには遠慮なく存分にお
やりなさいませ」

「そう、だったら安心……でも、わたくし、そなた
について、もう一つ気がかりなことがあります」

「それは？」

森都は、首をかしげた。

「わたくし、ある者から聞いたのだけれど、どうや
らキシタンが、そなたの正体に気がつき、そなた
の命をねらっているらしいことです」

姫は、心から心配そうにいった。しかし森都は、

めずらしく豪快な声を立てて、

「うあつ、はっ、はっ」

と笑った。そして、

「姫！ そのことなら、これも御心配にはおよびま
せん。老いたりといえど、まだまだキシタンのへ
っぽこ武士に、おくれをとる森都ではございませ
ん。万一おくれをとりましても、惜しい命ではあり
ません」